

# 日本の物語論・文学理論の物語生成システムへの取り込みに向けて Toward the Incorporation of Japan's Narratologies and Literary Theories into the Narrative Generation Systems by the Author

小方 孝 (Ogata Takashi)

岩手県立大学 (Iwate Prefectural University) t-ogata@iwate-pu.ac.jp

## 1 まえがき

狭義の物語論は、20世紀半ば頃からフランスを中心に提唱された学問分野であるが、それに直接的な、大きな刺激を与えたのは、それ以前のロシアフォルマリズムなどの形式志向・構造志向の文学理論であった。その後物語論は文学作品や物語作品の分析や研究の有力な一方法として世界の研究者達に影響を与えて行った。その影響は文学側の研究者に対するものに限定されず、認知科学や人工知能のような情報領域への影響も存在する。さらに遡って、物語論の嚆矢をアリストテレスに求めることも可能である。実際、Bal (2004) による全4巻に渡るアンソロジーの冒頭に収められた論文は、アリストテレスの『詩学』から抜粋されたものである。また、物語論で提唱された様々な方法は、個別・具体的な文学作品や物語作品の分析や解釈のためにも利用された。それと同時に、渡辺直己 (2012)などによって、日本の物語論的理論や方法や「技術」を摘出し、体系化しようという指向性における研究も始まっている。

本論文では、旧来の物語論や関連する文学理論の方法を、既存の作品の分析に適用・応用しようというアプローチではなく、「物語論のエッセンスを成す方法」を考慮して、そのような方法を共有する物語や文学の研究、方法、技術、技法などを、日本の物語史や文学史の中に探る。渡辺(2017)や大浦(2017)による日本の文学や小説の方法を、一種の物語論・文学理論として捉えたアンソロジーも出現し、また従来から筆者が続けて来ている歌舞伎の調査・分析・モデル化・システム化の研究 (小方, 2018; Ogata, 2019)の過程で、歌舞伎の中には、その記号論的な特性 (渡辺, 1989)故の数々の形式的・構造的とも言って良い特性があることを認識した。他方、上記渡辺や大浦によるアンソロジーは、渡辺が曲亭馬琴など江戸文学の技術の一部取り扱っているとはいえ、主に日本近代文学における物語論・文学理論のみを扱っている。これに対して、歌舞伎もそうであるが、筆者としては近代以前の古典的な時代における物語論や文学理論も含めた形で、日本の物語論や文学理論を扱って行きたい。

さらに、物語生成システムの観点から古典・近代・現代に渡る日本の物語論や文学理論を扱う、ということが、本研究のもう一つの大きな特徴である。物語生成システムの枠組みにおいてこの問題を扱うとは、生成という方向付けにおいてそれを取り扱うということの意味する。すなわち、調査・分析・獲得された物語や文学の知識や技法は、物語生成の機構の中に導入され、組み込まれる。逆に言えば、そのような方向付けにおいて、知識や技法や技術の調査・分析・獲得は行われる、ということになる。単に、作品の理解や分析や解釈のための「役に立つ道具」として、日本の物語論や文学理論を調査・検討しようというのではない。生成や創造や創出をめざして、さらにその形式化・モデル化・システム化まで進めようとしているのである。

本論文は、以上のような考えと方向付けにおいて行われる「日本の物語論・文学理論」へのアプローチへの序を成すものである。

## 2 日本の物語論・文学理論の例

### 2.1 古典文学の例

これまで以下のようなものにざっと目を通した—

- 藤原道綱母の『蜻蛉日記』序文 (1989):『蜻蛉日記』の冒頭の部分で、作者は一種の物語論を論じているが、これは次の『源氏物語』(「蜚」)のような物語称揚論ではなく、その逆の方向を持っている。すなわち、『源氏物語』の方は物語のような嘘(虚構)にこそより多くの真実が含まれると述べているのであるが、『蜻蛉日記』の方は「自分は物語のような嘘ではなく、自分の経験を記す日記を通じて本当の真実を描く」という宣言になっている。その点で、この宣言で語られていることは近代文学における「私小説」の概念と似ている。
- 紫式部の『源氏物語』(1993, 1994, 1995, 1996, 1997)における第二十五帖「蜚」:光源氏と玉鬘という主人公及び主要な女性登場人物の一人との間で、歴史と虚構・物語との比較の議論が行われる。この議論の内容は、

アリストテレス (1997)が『詩学』において論じている「歴史-虚構比較論」と似ている。物語においてこそ、人間の感情や意見を含めた自由な記述が展開され得、歴史よりも虚構(嘘)の物語の中にこそより多くの真実が含まれ得る、ということが、玉鬘や光源氏の言葉を通じて主張されている。アリストテレスの場合と同様、ここで物語の比較対象物として取り上げられているのは、中国や日本の歴史の古典である。それに対して物語は一見人々を誑かす嘘の塊であるが、なぜその方が人々を大いに魅惑するののかと言えば、物語は歴史のように公的な出来事を外的に語るだけではなく、人間の微細な感情や複雑な人間関係を内的に語ることが出来、後者の方にこそ微妙な心理や関係の中に日々を生きる人間にとっての真実がより多く含まれているからだとされる。

- 歌論:近代の和歌(短歌)は、古典和歌が背後に持っていた膨大な決まり事や規則を廃して、人間の自由な感情や感性を発露することが出来る形式として和歌を短歌に変貌させ、そのため、我々が古典作品の中に含まれている様々な技術を見る目を結果として阻害してしまった。この事情は、歌舞伎や人形浄瑠璃の作品に対しても言うことが出来る。例えば近松門左衛門は、江戸の作者達の中では珍しく、人間の生き生きした感情的側面を新鮮な形で描くことが出来た作者として、突出して称揚されたが、そのような状況の中で、我々は歌舞伎や人形浄瑠璃の作品における形式性や構構性を見る目を曇らされるに至ってしまった。古典音楽についても然りである。逆に言えば、今日のみからすれば、和歌の中に潜められた膨大な規則や技術や修辭的技法を、我々はより客観的な目を以って摘出することが可能になった、という風に無理に言うことが出来るかも知れない。和歌は俳句とは異なり、叙景と情緒とを一体化して(あるいは直接的に)表現することが可能な詩的形式であり、そのため後述の夏目漱石の『文学論』における  $F+f$  の公式も良く当てはまる。すなわち、和歌の構造はかなり物語的であり、またその物語の内容は、個別の和歌の背後に精神的に存在する世界に関する膨大な知識ベースによって支えられている。少なくとも古代、中世において、和歌は日本の文学の一大中心であった。源俊頼の『俊頼髓脳』、藤原俊成の『古来風躰抄』、藤原定家の『近代秀歌』など、実作者が理論的あるいは解説的な和歌論を著すという伝統もあ

った(歌論集, 1975)。和歌の理論の中から、あはれ・有心・幽玄・妖艶・花実・風情・やさし・をかし・本歌取・本説等々の概念が出現し、その他の文学や物語の世界に影響を与えて来たものも数多い。

- 世阿弥ら(能):世阿弥ら能楽の作者や演者達を書き残したものは、もともとは自分達の内部で回覧するための秘伝書であったが、その中には、特に劇的機構とは何かを巡る様々の洞察が含まれており、「序破急」の理論は特に有名である。これは一つの作品を構成する劇的構成のみを示すために言及されている概念ではなく、「風姿花伝」や「花鏡」や「世子六十以後申楽談儀」(以上、世阿弥芸術論集 (1976))などでは、寧ろ一日ないし数日の能の上演における通しの構造のための規範を示すものとして言及されていることが多い。しかし、「ただ一切、序破急を知るべし。文字一字に序破急あるべし。人のもの言ふ返事、「を」とやがて言ふは、序破急なり。声出さぬ前、序なり。はや「よ」といふところ、破なり。言ひ果つるところ、急なり。序破急なくは、とどくべからず。」と「世子六十以後申楽談儀」にあるように、序破急という概念は、一日の演能、一曲、一つの舞や一つの音など、すべてのものの構成の原理とされている。従って、これは一種階層的な構造を持つ理論的枠組みであり、これを一曲を演者が如何に上演するかについてのよりマイクロな理論として置き換えることも出来るし、それと一つの作品の構造と結び付けて考えることも出来る。
- 近松の虚実皮膜論(きょじつひにくろん):近松半二は、人形浄瑠璃が作品創出の創造性を保持していた最終の時期における最大の作者であったが、その父親であり儒学者であった穂積以貫 (1692-1769)が書いた『難波土産』(守随・大久保, 1959)は、近松門左衛門の所謂虚実皮膜論について論及している。これは、芸術の訴求力はリアルあるいは真実と非リアルあるいは虚構との間の微妙な隙間にある、とする一種の文学理論であり、近松の世話物も時代物も、この実践となっている。特に『曾根崎心中』以降の心中物の多くは、当時の実際の事件に取材したものであり、虚実皮膜理論の見事な実例となっている。
- 馬琴の稗史七則:渡辺 (2012)は、曲亭馬琴 (1767-1848)の『南総里見八犬伝』(1814-1842)における「稗史七則」という一種の文学理論を紹介しているが、これは小説・物語を書く上での七種類の技法(主客、伏線、しん染(下染)、照応、反対、省筆、隠微)につい

て論じたものである。

## 2.2 近・現代文学の例

一方、近・現代文学においては、多くの批評的作品が、日本と西欧の文学的伝統を融合することによって独自の理論的文学研究を提案して来た。しかし体系的な文学理論、物語論と呼んで良いようなものは少ない。以下はその稀有な例である—

- 夏目漱石(1867-1916) (2007)の『文学論』: 文学を  $F+f$  として捉える公式に基づいて全編が構成される。F は「焦点的印象又は観念」=「認識的要素」であり、f は F に「附着する情緒」=情緒的要素であり、これに基軸概念に、それぞれの内容、それぞれの時間的変化、文学的技法(とその相互関係)、社会レベル(集合的なF)が体系的に論じられる。文学的技法としては、投出語法、投入語法、自己と隔離せる聯想、滑稽的聯想、調和法、対置法、写実法、間隔論が提示されているが、これらは基本的に物語言説のカテゴリーに含まれるものである。このように、この文学論は、文学的内容を表現する形式を知的要素乃至素材としての要素とそれによって喚起される情緒的要素との関係において分析する枠組みであり、漱石は、情緒的要素と論理的要素の関係という観点から主に近代イギリスの文学作品を分析した。
- 吉本隆明 (1924-2012) (1965)の『言語にとって美とは何か』:「自己表出性/指示表出性」という対になる二つの概念の関係と相克において古代から近・現代に至る日本の文学作品の独自の分析を行った。多くの静的な文学批評とは一線を画すもので、拡張文学理論や物語生成システムの観点からは、いわば文学の制御のモデルと見做せる可能性がある。この『言語にとって美とはなにか』を中心とする吉本言語論は、共同幻想・対幻想・個人幻想という、主に『共同幻想論』(吉本, 1968)を通じて提唱された思想的枠組みと関連している。その理論構成は、制度等規範として存在する共同幻想に対して、文学における個人幻想をどのように正当に対置させるかという問題意識に貫かれていた。また、かつての日本の左翼の「転向」は、しばしば「党」からの離脱が家族に回収されてしまうという経路を辿ったが、吉本は家族的共同体に対応する対幻想を共同幻想と同等の重みを持つものとして措定し、必ずしもこの種の転向を否定しなかっただけでなく、さらに文学の中に個人幻想の拠点を求め、文学に共同幻想や対幻想の共同性を相対化する価値・意義を求めた。言語論乃至言語思想においてもこの発想が利用され、制度・規範としての共同幻想的な部分、さらには家族的な対幻想的な部分に対して、個人幻想的な部分をどのように浸透させるか、そこに文学というものの価値があるというのが、吉本言語論における基本思想であった。因みに、「物語」とは、文学作品の中への共同幻想的なものの侵入を意味し、従って吉本の文学論は、同時に物語批判でもあり、このような観点は、蓮實重彦らも共有している。そのような意味で、彼らが文学主義的であるとすれば、中上健次などは物語主義的である。吉本言語論を通じて、共同幻想的なものは言語における「指示表出性」として記述され、一方で個人幻想的なものは言語における「自己表出性」として記述される。(物語生成システムとの関連では、恐らく現在のコンピュータや人工知能によって可能となるもののレベルは、共同幻想的なもの乃至指示表出的なものとしての物語や文学の生成の部分であろうと考えられる。これに対して個人幻想的なもの乃至自己表出的なものは、他者とは何かが違うものとしての自己、という意識を持たないものとしてのコンピュータや人工知能にとっては、不可能な部分であろう。このような観点からは、人工知能としての物語生成システムは、当面あくまで共同幻想的・指示表出的なレベルに留まるだろう。一つの考えは、共同幻想的・指示表出的なものとしての物語生成システムと、自己幻想的なものとしての人間の物語生成とを切り分けることである。)
- 渡辺直己(2012)の『日本小説技術史』: 全体として、渡辺は主に近代日本文学の小説を扱った。筆者は物語生成の観点から、これらの物語論的、文学理論的な角度から見られた形式的、技法的な方法を、検討することが出来る。この本では、以下のような技法や方法が検討されている—
  - (1) 小説の実践理論としての稗史七則: 曲亭馬琴.
  - (2) 三人称多元視点による焦点移動の技法: 二葉亭四迷 (1864-1909).
  - (3) 一人称の技法: 森鷗外 (1862-1922).
  - (4) 「突然」と「偶然」を用いた、物語の切断と変換の技法: 樋口一葉 (1872-1896).
  - (5) 内部の記述と三人称単一視点の技法: 田山花袋 (1872-1930), 国木田独步 (1871-1908), 島崎藤村 (1872-1943), 岩野抱鳴 (1873-1920).
  - (6) 形式指向の小説執筆技法: 夏目漱石.
  - (7) 事物の詳細記述と流動的な時間処理: 志賀直哉 (1883-1971), 徳田秋声 (1872-1943).

- (8) メタフィクション的な技法及び隠喩的な技法: 芥川龍之介 (1892-1927), 佐藤春夫 (1892-1964), 谷崎潤一郎 (1886-1965).
- (9) 歴史小説における対比的な技法: 谷崎潤一郎, 森鷗外.
- (10) 新感覚理論, 驚きの比喩, 事物の列挙, 非線形と飛躍, 心理の断片化, 純粋小説, 読人称技法: 横光利一.
- (11) 模倣の役割: 尾崎翠 (1896-1971).

さらに, 何冊かのアンソロジーの本が物語論や文学理論の観点から, 日本近代文学における物語や文学の技法や方法を, 包括的に検討している. 例えば, 渡辺(2017) は, 一部江戸時代を含むが, 主に明治から1980年代までの日本の物語論的, 文学理論的な研究を集成した—

- 上田秋成 (1734-1809):『雨月物語』序
- 本居宣長 (1730-1801):『源氏物語玉の小櫛』(抄)
- 曲亭馬琴:「稗史七則」
- 仮名垣魯文・糸野有人:「著作道書き上げ」
- 坪内逍遙 (1859-1935):『小説神髓』(抄)
- 二葉亭四迷:「小説総論」
- 斎藤緑雨:「小説八宗」
- 北村透谷:「人生に相渉るとは何の謂ぞ」
- 松原岩五郎:『再暗黒の東京』
- 内田魯庵:『文学者となる法』(抄)
- 森鷗外・幸田露伴・斎藤緑雨:「三人冗語」(抄)
- 樋口一葉:「日記」(抄)
- 正岡子規:「歌よみに与ふる書」(抄)
- 高山樗牛:「美的生活を論ず」
- 田山花袋:「露骨なる描写」
- 岡倉天心:『茶の本 (The Book of Tea)』(抄)
- 木下尚江:「革命の無縁国」(抄)
- 夏目漱石:「写生文」
- 島村抱月:『蒲団』評
- 柳田國男:『遠野物語』(抄)
- 石川啄木:「時代閉塞の現状」
- 平塚らいてう:「元始女性は太陽であった」
- 南方熊楠:「猫一疋の力に憑って大富となりし人の話」
- 大杉栄:「生の拡充」
- 生田長江:「自然主義前波の跳梁」
- 岩野泡鳴:「現代将来の小説的発想を一新すべき僕の描写論」
- 折口信夫 (1887-1953):「ははが国へ・常世へ」
- 柳宗悦:「朝鮮の友に贈る書」(抄)
- 有島武郎 (1878-1923):「宣言一つ」
- 西光万吉:「全国水平社宣言」
- 廣津和夫:「散文芸術の位置」
- 久米正雄:「私小説と心境小説」
- 青野季吉:「自然生長と目的意識」
- 大宅壮一:「文壇ギルドの解体期」
- 蔵原惟人:「プロレタリア・リアリズムへの道」
- 小林秀雄:「様々なる意匠」
- 尾崎翠:『第七官界彷徨』の構図その他」
- 谷崎潤一郎:「陰翳礼賛」(抄)
- 三木清 (1897-1945):「シレストフ的不安について」

- 戸坂潤:「反動期における文学と哲学」
- 保田與重郎:『日本浪漫派』広告
- 中野重治:『文学者に就て』について」
- 横光利一:「純粋小説論」
- 高見順:「描写のうしろに寝てみられない」
- 花田清輝:「笑の仮面」
- 坂口安吾:「文学のふるさと」
- 石川淳:「江戸人の発想法について」
- 武田泰淳 (1912-1976):『司馬遷』(抄)
- 志賀直哉:「国語問題」
- 桑原武夫:「第二芸術」
- 小野十三郎:「短歌的抒情に抗して」
- 伊藤整:『小説の方法』(抄)
- 中村光夫:『風俗小説論』(抄)
- 竹内好:「近代主義と民族の問題」
- 大西巨人:「俗情との結託」
- 吉田健一:「東西文学論」(抄)
- 吉本隆明:「前世代の詩人たち」
- 丸山眞男:『日本の思想』(抄)
- 土方巽:「刑務所へ」
- 宮川淳:『鏡・空間・イマージュ』(抄)
- 江藤淳:『成熟と喪失』(抄)
- 入沢康夫:『詩の構造についての覚え書』(抄)
- 稲垣足穂:『少年愛の美学』(抄)
- 三島由紀夫 (1920-1970):『文化防衛論』(抄)
- 秋山駿:「彼等はドブネズミのようだった・・・」
- 高橋悠治:「小林秀雄『モーツァルト』読書ノート」
- 中平卓馬:『決闘写真論』(抄)
- 中上健次:『紀州』(抄)
- 蓮實重彦:『夏目漱石論』(抄)
- 柄谷行人:『日本近代文学の起源』(抄)

一方大浦(2017) は, 近・現代日本における小説家, 思想家, 批評家, 詩人などの著作から物語論的・文学理論的な研究を取り上げそれらを断片的に示すことで, 全体的な見取り図を描こうとしている. 以下のような話題と著者が示されている—

- 小説の理論: 坪内逍遙, 廣津和夫 (1891-1968), 久米正雄 (1891-1952), 伊藤整 (1905-1969), 三島由紀夫, 古井由吉 (1937-).
- 記述(写生)の理論: 正岡子規 (1867-1902), 高濱虚子 (1874-1959), 田山花袋, 徳田秋声, 岩野泡鳴, 高見順 (1907-1965).
- 物語の理論: 折口信夫, 生田長江 (1882-1936), 亀井英雄 (1937-2016), 坂部恵 (1936-2009), 東浩紀 (1971-).
- 詩的言語の理論: 萩原朔太郎 (1886-1942), 吉本隆明, 入沢康夫 (1931-), 別宮貞則 (1927-), 佐藤信夫 (1932-1993), 北川透 (1935-).
- 虚構の理論: 森鷗外, 伊藤整, 丸山政男 (1914-1996), 筒井康隆 (1934-), 野口武彦 (1937-), 外山慈比古 (1923-).
- 読者の理論: 片上伸 (1884-1928), 柳田國男 (1875-1962), 大熊信之 (1893-1977), 外山慈比古, 桑原武夫 (1904-1988), 大塚英史 (1958-).
- 起源と発生の理論: 土居光知 (1886-1979), 折口信夫, 松田勝美 (1923-2010), 兵藤裕己 (1950-), 藤井貞和 (1942-).

- 文学とは何か: 夏目漱石, 九鬼周造 (1888-1941), 岡崎義恵 (1902-2000), 加藤周一 (1919-2008), 桑原武夫.

### 2.3 民話学における民話の型の研究

さらに, 民俗学の中の民話学において推進されて来た「民話の型」もしくは民話モチーフの研究は重要である. プロップ (1987)の「昔話の形態学」も勿論この系統の中から現れたものであるが, プロップの場合は, 多数の民話の型やモチーフをそのまま羅列的に示す従来の研究を一步進めて, あるジャンルに属する多数の民話を総合して, その共通の物語文法(基本的にはストーリー文法)を記述しようとしたのである. 人工知能・認知科学の幾つかの物語生成の研究も筆者自身の初期物語生成研究も, このプロップの形式的研究を取り入れ, それによって物語を生成する機構を作ったが, 現在の認識としては, この抽象化によって, 物語が本来持っている多様で豊饒な要素が削ぎ落されてしまったのではないかと考えている. プロップ自身にとっては, この物語文法の研究はその長いキャリアの初期の研究で, その後の努力は, ロシアの民話に関連する民俗現象の収集と整理・体系化に注がれた.

しかし, これまで物語生成研究の中では, プロップにおけるこの民俗学的努力に注目した研究は存在しない. それに対して筆者は, 修士論文執筆当時(1992年以前)から, 抽象的な物語文法とそれを背後で支える多様・豊饒な知識要素を融合することの重要性を指摘しており(小方, 2007), 1995年から数年間に渡り, 集中的に日本の民俗学や民話学を研究し, 「多様・豊饒な知識要素」の調査に努めた. その成果の利用や発展には時間がかかったが, ほぼ一昨年(2018)から, 20世紀の後半に開啓吾らによって行われた日本の民話学の体系的な成果の調査に着手し, 現在までに, 関・野村・大島(1980b)の『日本昔話大成』第十一巻における1000弱の民話の型(モチーフに相当)の記述を形式的に整理し, そのすべてをCommon Lisp (Steele, 1990)のプログラム形式の記述に変換し, 統合物語生成システム(Integrated Narrative Generation System: INGS)(小方, 2018; Ogata, 2019)における主に「ストーリーコンテンツ知識ベース」中の一カテゴリーに, 「物語(ストーリー)生成のための種」の一種として格納し, その他の種と共に物語(ストーリー)生成に使用出来るようにする準備を現在進めている. Ito, Ono, and Ogata (2018), 小野・伊藤・小方(2019), 小野・小方・伊藤 (2019)などがこまごまの成果を記述した. さらに現在, 『日本昔話大成』の主要部分(第一巻から第十巻)(関, 1978a, 1978b, 1978c, 1978d, 1978e, 1979a, 1979b, 1979c,

1979d)(十二巻(関・野村・大島, 1979e)は資料編)の詳細な調査・分析を行い, 民話の変奏(ヴァリエーション)の記述を進めている. 関らの民話の収集と体系化は, 日本の全国各地から数多くの民話を収集するところから始まり, そのヴァリエーションの様態から個々の基本の型を画定して行くという手順で進められた. しかし記述のスタイルとしては, 基本的な型の記述がまずあり, それに対するヴァリエーション(具体的には地域ごとの変異)が示されている. 筆者らの研究では, このヴァリエーションの記述を収集・整理し, 基本の型の記述にこれらのヴァリエーションの記述を組織的に付加して行き, 「民話の基本型+変異型を体系的に記述」することを目指している. また民話のヴァリエーションの記述の中には, 物語の内容的な側面に対するヴァリエーションの記述と, 物語の手法や修辞の側面(より大きな範疇を示す言葉では物語言説の側面)に対するヴァリエーションの記述とがじり合っている. 筆者の再分析はこれらの二種のヴァリエーションのタイプを区別して行われる.

### 3 言葉としての歌舞伎, 歌舞伎の物語論を求めて

歌舞伎研究は, 当初から批評的文献によって支えられて来ており, それは歌舞伎における非常に大きく・重要な特徴であると言って過言ではない. すなわち, 江戸時代から, 歌舞伎は「役者年代記」「芝居年代記」などと呼ばれる, 主に役者の身体的演技やその型を批評する文章を持っており, またその中には歌舞伎のストーリーや舞台装置など全般に渡る記事が含まれていた. すなわち, 歌舞伎には膨大な量の研究や批評がある. 中でも狭義の研究を超えた「歌舞伎批評」は江戸時代の「役者評判記」に始まる. 中野 (1985)によれば, 江戸時代, 宝暦 (1751-1763)から文化 (1804-1817)にかけての時期, 多様な「名物評判記」が叢生するが, その先蹤を成したのが「遊女評判記」と「役者評判記」であったとされる. 松崎 (2000)や田口 (2003)によれば, 役者評判記とは, 歌舞伎役者の技芸を批評する書物であり, 17世紀後半から明治 20 (1890)年代まで続いた. 元禄から享保期の主要な執筆者が浮世草子作者の江島其碩であったことが知られている. 明治時代以後現在に至るまで, 役者の「型」の記録と伝承を目的とした新しいタイプの歌舞伎批評も行われており(三木, 2004; 志野, 1991; 渡辺, 2000, 2004, 2013), 歌舞伎の研究と批評は一つの独特の領域と伝統を形成している. これらの例からも分かるように, 歌舞伎は受け手側にも優れて実践的であることを要求するため, 研究と批評は分かれ難く結び付い

た面がある。

面白いことは、例えば歌舞伎の脚本は、人形浄瑠璃の脚本に比べて、発展が遅く、底本ないし定本として形態が定められることも少ないものであり、歌舞伎の上演や演技というものは、当初から、脚本という言葉で書かれたものに準拠してのみ行われるものではない、という特徴を持っていた。しかしながら、それだからと言って、歌舞伎が言葉とは関連の薄い、専ら身体的なものとして確立されて来たのかと言えば、それは明らかにそうではない、と言わなければならない。すなわち、歌舞伎という世界の総体においては、言葉というものが非常に大きな役割を果たす、という明らかな伝統が存したのである。それは批評・評論であり、役者による演技や型の伝承であり、上演その他諸種の記録であり、また宣伝・広告なども含まれていた。従って、歌舞伎という世界における言葉を収集・整理・保存・資料化などを行うという作業もまた、歌舞伎研究における重要な一環となるのである。

### 3.1 総攬

歌舞伎の研究書の仮分類を試みる。なおすべての項目に渡って、歌舞伎に関する本は、学術的なものと、一般読者を対象とした啓蒙的・入門書的なものが混在しているが、ここでの方針としては、基本的に学術的な文献を取り上げるが、中には非常に高度な入門書・啓蒙書、啓蒙的な学術書のような中間領域のものも含まれている。また、文献の調査・分析には、①通時的調査・分析(江戸時代からの著作が対象)、②共時的調査・分析、の二つのタイプが考えられるが、ここでは主に②において行う。なお参考として、服部・富田・広末(2000)による近年の歌舞伎関連図書の分類は以下のようになっている—①総説・事典、歴史に関する本、②作品に関する本、③作者に関する本、④役者に関する本、⑤演出に関する本、⑥鑑賞に関する本、⑦劇場に関する本、⑧その他(文献の翻刻、欧文図書、動画ソフト)。他に、「雑誌」を網羅した情報もある(富澤・藤田, 2012)。

さらに、分類には、「方法」による分類と「対象」による分類があり得る。また、「学術的」対「一般的」という対照も考えられる。これらを踏まえながらも、ここではあまり厳密になることはせず、次のような分類を行う(筆者がこれまで参照した範囲において各分類に含まれる実際の文献は Ogata (2019) に網羅されているので、ここでは割愛する) —

#### (A) 研究

- (1) 全般的・総説的: 歌舞伎に関する全般的・総説的解説を行った書物であり、所謂入門書もあれば学術的記述として成り立つ

ものもある。以下の役者や作者その他明示的な対象を記述するもの以外の項目で、事典類に含まれる記事はここに含まれるものとする。方法による分類の一種である。

- (2) 役者に焦点を当てた伝記的等研究 [対象による分類]: 伝記的研究も含まれる。
  - (3) 作者に焦点を当てた伝記的等研究 [対象による分類]: 作者の伝記的研究もこの中に含まれる。
  - (4) 作品に焦点を当てたもの [対象による分類]: 様々な角度から作品を調査・分析する研究である。
  - (5) 音楽に焦点を当てたもの [対象による分類]: 歌舞伎と関連する様々な音楽(声楽、器楽曲など)に関連する研究である。
  - (6) 劇場や環境に焦点を当てたもの [対象による分類]: 歌舞伎の劇場や上演などの外的環境に関する諸研究である。
  - (7) 民俗学的研究・芸能的研究 [方法による分類]: 民俗学的性格を特に強く持った歌舞伎関連研究である。
  - (8) 歴史的研究 [方法による分類]: 歌舞伎関連の歴史に焦点を当てた研究である。
  - (9) 社会学的研究 [対象による分類]: 特に近年の増えている、歌舞伎に関連する様々な概念を社会学的の方法を援用して調査・分析する研究カテゴリーである。例えば劇場研究などでも、方法的意識のより強いものである。
  - (10) 文学的・芸術的・美学的・批評的研究 [対象による分類]: 狭義の研究としてよりも、方法的意識の強い批評として分類した方が相応しいタイプの文章である。
  - (11) 周辺研究 [対象+方法による分類]: 歌舞伎と関連する他のジャンルなど、例えば能、狂言、人形浄瑠璃、新派、新劇などを取り扱うカテゴリーであり、対象と方法との両者に関連する分類である。
  - (12) 歌舞伎連の情報学的・認知科学的研究 [方法による分類]: 情報学や認知科学の方法で歌舞伎に関連する何らかの対象や概念を調査・分析する研究分野である。
  - (13) 辞書、事典類: 海外のものを含めて。歌舞伎や関連する領域をカバーする事典や辞典の類である。
- (B) 劇評
- (14) 劇評類(近世～近代) [通時的分類]: 江戸時代の役者年代記から始まり、その後の時代における雑誌記事などを含む。
  - (15) 劇評類(現代) [共時的分類]: 現在の、本、雑誌、新聞記事などを含む。
- (C) 記録
- (16) 歌舞伎の記録①: 劇場における筋書き類:



劇場の窓口や売店で売っている上演中の芝居のためのパンフレットであり、関連する図書館や資料館にも保存されている。

- (17) 歌舞伎の記録②: 関連する浮世絵集, 写真集, 映像集などを含む。
- (18) 雑誌類: 歌舞伎に関連する定期刊行の雑誌が各種刊行されている。
- (19) 芸談: 役者をはじめ歌舞伎の関係者が語る芸に関する談話を本の形で固定化したもの, あるいは役者など関係者が自身で執筆した芸についての談話などを含む。
- (D) 実作
- (20) 歌舞伎及び関連ジャンルの脚本(「台帳」): 歌舞伎脚本全集類などを含む。

### 3.2 歌舞伎の物語論の理論書

#### (1) 『作者式法戯財録(さくしゃしきほうげざいろく)』

江戸時代の歌舞伎作者二代目並木正三(「宿無團七」などで有名な初代並木正三ではない)は、入我亭我入という変名で『作者式法戯財録』(1972) という著作を現した。この本の全体構成は次のようになっている—

- 序説的な部分
- 「作者差別之事」
- 「浄瑠璃作者連名」: 近松門左衛門, 紀海音, 文耕堂, 並木千柳を「狂言作者四天王」とし, その他 56 人の浄瑠璃作者を挙げている。多くの作者に注釈的な説明が付されている。
- 「歌舞伎作者之部」: 82 人の歌舞伎作者が挙げられている。この最後に, 本稿図 1 の「作者心得之事 五花十葉ノ伝」の図及び図 2 の「二道四別之伝」の図が掲げられている。
- 「看板之心得」
- 「三都狂言替り有事」
- 「堅筋横筋之事」: 下に引用する文。
- 「四季人情差別之事」
- 「狂言之場行工合之事」
- 「作者金言之事」
- 「作者役場心得之事」
- 「役者役場之事」
- 「役場甲乙之事」
- 「役割番附之事」: 36 人の役者が挙げられている。
- 「表八枚看板の事」: 「之」ではなく「の」となっている。
- 「作者支配之事」
- 「江戸紋番附之事」
- 「大阪絵看板之事」
- 「一夜附の事」/「役納る之事」/「作者出勤之事」
- 「幕明の景様之事」/「引上て下に置ぬ」/「一件男女にて引しめる事」

下に, 「作者心得之事 五花十葉ノ伝」をそのまま図 1 に示す。

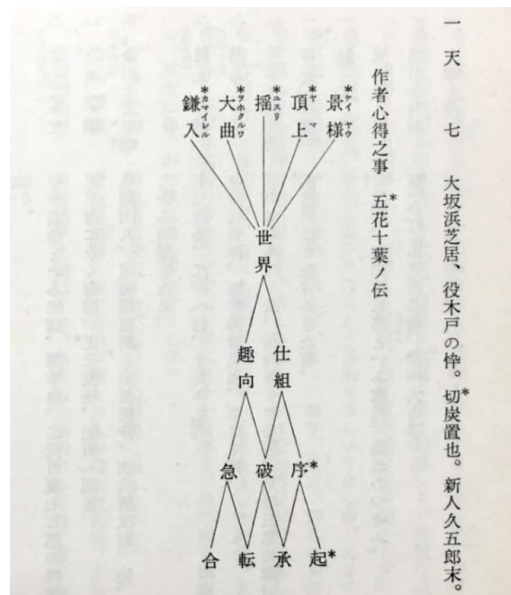


図 1. 「作者心得之事 五花十葉ノ伝」

これは一種の歌舞伎作劇法を成す。郡司正勝による注を参考にして説明すると, この「作者心得之事 五花十葉ノ伝」の図式によれば(もともとの本文に説明はない), 物語の世界は, 次のような物語構造において展開される(戯曲の五段構成に相当する)—

- **景様(ケイヤウ)**: 「形容」と同じとされ, 事物の形を序幕で見せることを意味する。
- **頂上(ヤマ)**: 「漸層」に当たる。
- **揺(ユスリ)**: 最も揺れ動くもの, 活動することを意味する。
- **大曲(ヲホクルワ)**: 物語が一大展開をする場である。
- **鎌入(カマイレル)**: 刈り入れすなわち大団円を意味する。

さらに, ある仕組と趣向において展開する。仕組とは物語の型に沿った通常の展開方式を意味し, 趣向はそれに対する作者独自の工夫・アイデアを意味すると, 解することが出来る。それぞれの下に, 「序」「破」「急」, その下に「起」「承」「転」「合」という, 物語の展開の仕方に関するパターンが記述されているが, 仕組はこれを基本的に踏襲すること, 趣向はそこに独自の変異・異化を差し込むことを意味するのであろうか? (この辺の具体的説明や注は引用文献にはない。)本稿 2.1 節で言及したように, 序破急は世阿弥による能の物語やその上演構成から一曲や一音の構成の基本原理に関わる概念であるが, ここでは一つの作品の基本構造(の一面)を示す概念として序破急が使われていると思われる。一方, 起承転合は四行漢詩の典型(規範)構成を示す概念である。そ

これらの関係において、序は起承と結び付き、破は承転と結び付き、急は転合と結び付き。序破急におけるそれぞれの要素間の移行が、起承転合を利用して補足されていると解することも出来る。

『作者式法戯財録』の「堅筋横筋之事」の部分には、上記世界と関わる、緋交ぜ（三浦, 2000; Ogata, 2018）に関連すると思われる次のような記述もあるので、引用する。「大筋を立てるに、世界も仕ふるしたるゆへ、あり来りの世界にては、狂言に働き（動き）なし。筋を組立てる故、堅筋横筋と云。太閤記の堅筋へ、石川五右衛門を横筋に入る。また拍手・公成・桜子・桂子・毛谷村六助など、皆横筋なり。堅筋は世界、横筋は趣向に成。堅は序なり。大切まで筋を合せども働き（動き）なし。横は中程より持出して働きと成て狂言を新ら敷見せる。大事の眼目なり。」

(2) 『世界綱目(せかいこうもく)』

図1や上の文章における「世界」とは歌舞伎の物語の制作において利用されて来た物語の体系（一種の知識ベース）を意味する。「世界」に関連する江戸時代の文書として『世界綱目』(1916)が残されており、これを見ると歌舞伎における世界とは何かが良く分かる。『世界綱目』は以下の四部に分かれる—

- (1) 歌舞伎時代狂言世界之部: 次の58の世界を含む—神功皇后, 仁徳天皇, 衣通姫, 浦島, 松浦佐用姫, 聖徳太子, 大職冠, 天智天皇, 大友皇子, 大友真鳥, 百合若, 安部仲麿, 弓削道鏡, 中将姫, 田村丸, 融大臣, 小野篁, 小町, 松風村雨, 業平, 道風, 北野御記, 蟬丸, 将門純友, 平惟茂, 源氏六十帖, 四天王, 奥州攻, 殺生石, 保元物語, 平治物語, 平家物語, 頼政, 伊豆日記, 義経記, 源平軍, 曾我, 頼家治世, 實朝治世, 和田合戦, 鉢木, 太平記, 東山, 甲陽軍, 出世奴, 小栗, 荳菴, 三庄太夫, 愛護, 角田川, 信田, 俊徳丸, 望月, 放下僧, 大内之介, 甲賀三郎。
- (2) 御家狂言之内敵討之部ならびに類: 次の7の世界を含む—義士傳, 伊賀上野, 浄瑠璃坂, 亀山, 御堂前, 巖柳島, 非人敵討。
- (3) 歌舞伎世話狂言世界之部: 次の74の世界を含む—一代男, 與之助, お七, 曾根崎, 重井筒, お千代半兵衛, お花半七, 三勝半七, お染久松, お菊幸助, お梅桑之助, 丹波與作, 山崎與治兵衛, お夏清十郎, 夕霧伊左衛門, 山屋新兵衛, 小金彦惣, お三茂兵衛, 小春治兵衛, 金村屋, 助六総角, 椀久松山, 淀屋, 本町二丁目, お龜與兵衛, お萬源兵衛, おしゅん傳兵衛, 梅川新七, 小いな半兵衛, お勘半九郎, 樽屋おせん, おさい道德, 神田與吉萬字屋高崎, 金屋金五郎額の小さな, おはん長右衛門, 信田妻, 道成寺, 富士浅間, 薄雪, 清玄, 鳴神上人, 七草四郎, 高尾, 糸豊勝, 天竺徳兵衛, あこぎ平治, 累, 東金茂衛門, 鐘の権三, 五人男, 團七, 黒船, 濡髪, 梅の由兵衛, 源五兵衛, 湯の勘右衛門, 帯刀男達, 神祇組, 銘職人, 佛教大師, 役行

者, 弘法大師, 柿本記僧正, 空也上人, 法然上人, 新泉馬上人, 日蓮上人, 遊行上人, 西行, 兼好, 一休, 自然居士, 釋氏名目。

- (4) 神祇之部: 次の3の世界を含む—淡島, 常陸帯, 高砂。

各世界は、次の項目から成る—①役名: その世界に登場する主要な人物の一覧を示す。②引書: その世界が現れる旧来の文献の一覧を示す。③義太夫浄瑠璃: その世界が使用された義太夫浄瑠璃の作品名を示す。例えば 歌舞伎時代狂言世界之部における、項目数の比較的少ない「小栗」の世界は、次の内容を含んでいる—

- 役名 (14): 小栗判官兼氏 (實は孫五郎), 横山治郎, 栗橋太郎, 戌亥局, 青臺の長, 鬼次新左衛門, 常陸小萩, 遊行上人, 池庄司時門, 照手の姫, 鬼王源太, 後藤新左衛門, 同三郎, 横山郡司 (式部太郎)。
- 引書 (2): 『小栗實記』, 『新編鎌倉志』。
- 義太夫浄瑠璃 (5): 『小栗判官』, 『小栗判官軍街道』, 『今様小栗判官』, 『忠臣金短冊』, 『『鬼鹿毛武蔵鑑』。

さらに、郡司正勝によって「作者道の人生訓」との注が付せられている別の図(「二道四別之伝」)のコピーを図2に掲げる。本文に図の説明はなく、郡司による注釈も簡略なものであるため、正確な解釈は難しい。作者に関する記述という理解を少しずらして、登場人物のタイプ分類として解釈し直すことも出来るのではないだろうか。

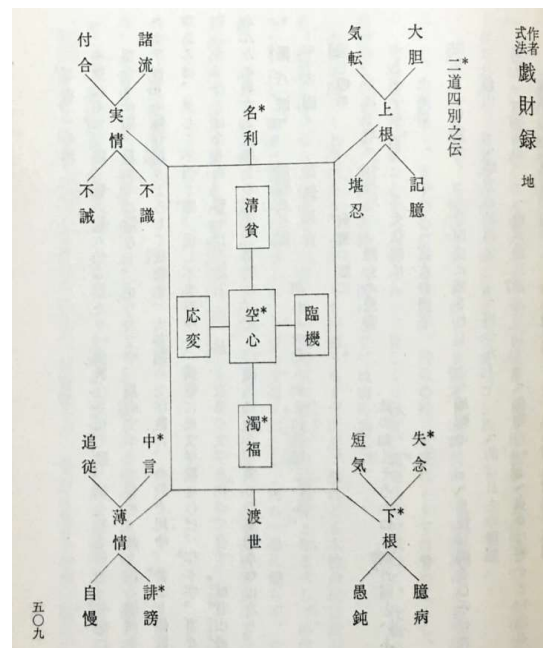


図2. 「二道四別之伝」

4 物語生成システムへの取り込みへ



#### 4.1 恣意的+構造的アプローチ

本研究では、ある特定の物語のタイプ(ジャンル)や作者など、「特定の対象」に焦点を当て、それを模擬するような形で物語生成を行うというアプローチは採用しない。ある程度恣意的に、すなわち自分(筆者自身)の(長期的な及びその時々)の嗜好に合わせて、様々なジャンルやタイプの物語を選択・収集し、それらを生成の種とするような、そのような進め方を採用する。

ロラン・バルト(1973)による『S/Z』は所謂「テキストの戯れ」の具現として知られているが、これをその前のより固い・静的なアプローチとしての物語構造分析から完全に切り離されたものとして、あるいは離反したものとして捉えるのは間違いであり、寧ろそれ以前からの物語論の融合・発展形態として捉えられるべきものである。ここでバルトが主張したのは、小説テキストは、恣意的に捉えられたあらゆる断片を起点として、構造的さらにはネットワーク的に理解・解釈されることが可能であるということであり、この一見するところのテキストの戯れは、他方では実は強力な読み手=作者を要請しているのである。バルトはこれを一冊の小説という範囲において行ったが、多数の小説や物語などのテキストに範囲を広げて、恣意的な物語の構造的・ネットワーク的分析を行うことも可能であり、筆者は今までこのような方向付けで物語分析を(物語生成のために)行うことであった。

(付言すれば、実際、人間の作者や語り手の場合、子供の頃から様々なジャンルやタイプの物語を受容・吸収し、咀嚼し、脳の中に組織化し、その組織化された、同時に絶えず流動的な思考過程の中から、自身の新しい物語を生み出したり語ったりする。勿論、大きな志向性の二つの型として、できるだけ範囲を絞り(集中させ)、それを真似(模擬・シミュレート)することを通じて新しい作品を生み出そうとする傾向の人が一方には存在する。他方で、もっと気儘なタイプの人も存在する。前者は、何らかの専門領域や特定テーマに思考を集中しそこに特化した形で思索活動を行うことが得意であるが、後者にとっては、専門領域への特化や絞り込みは不得意である。そのどちらがどうと言うわけではなく、タイプの違いであり、筆者の場合は明らかに後者のタイプである。)

同時に、「恣意性を構造化する」機構を用意する。すなわち、恣意的に選ばれた素材から作られた謂わば料理を、見通し良く配置する構造を用意する。これについては、小方・金井(2010)の第4章・第5章で語り、特に小方・川村・金井(2018)所収の筆者による第17章「内部への物語生成または私物語に向けて」は、恣意的+構造的な、物語生成のための物語の収集・分析・保管方法に

関する一つの計画を示している。

#### 4.2 統合物語生成システムへの取り込みの方針

本稿では扱った類の日本の物語論や文学理論は、基本的にINGRSの物語コンテンツ知識ベースへの反映を想定して、さらに整理・構造化される。

しかしその前に、そこまで具体的ではないレベルにおいて、本稿のような試みが、筆者の研究(特にINGRS)に、どのような示唆やヒントを与え得るかについても考えておきたい。例えば『世界綱目』は、INGRSにおける物語の知識ベースの体系的な構成に示唆を与えるだろう。『戯財録』における特に図1や図2、さらに世界・絢交ぜに関する記述は詳細な文章化による概念化と手順化が可能であろう。『戯財録』の物語構造図式(図1)には世阿弥の序破急も含まれており、総合的な物語文法への示唆を与える。近松の虚実皮膜の思想は、物語における虚構と事実の配分の技法につながる。漱石の『文学論』、吉本の『言語にとって美とはなにか』、渡辺の『日本小説技術史』などは、より直接的に物語生成の技術、特に物語言説の技術に貢献するだろう。これに対して、『日本昔話大成』に体系化された民話物語の型の記述は、物語の内容すなわちストーリーの面に貢献する。しかしその中に大量の記述がある物語の変異・ヴァリエーションの記述は、物語の語り方すなわち物語言説の側面にも役立つ可能性が大いにある。

#### 5 あとがき

本論文では、物語生成システムへの何らかの形で導入を目的とした「日本の物語論・文学理論」の調査・分析について述べた。これまで、断片的な形で日本の物語論や文学理論について記述して来たが、今回ある程度まとまった枠組みを示すことが出来た。今後は、より包括的に対象の収集・整理を行い、個々の理論や方法をより詳細に調査・分析し、その結果を物語生成システムに有機的に取り込んで行く。

**謝辞** 本論文は、科研費(No. 18K18509) (「歌舞伎の物語生成—多重物語構造・型・芸能情報システムに基づく調査と構成—」)の支援を受けている。

#### 参考文献

- アリストテレス, 松本仁助・岡道男 訳 (1997).『アリストテレス詩学, ホラーティウス詩論』. 7-222. 岩波書店.  
Bal, M. (2004). *Narrative theory: Critical concepts in literary and cultural studies (Volume I, II, III, IV)*. NY: Routledge.  
ロラン・バルト, 沢崎浩平 (1973).『S/Z—バルザック『サラジヌ』の構造分析—』. みすず書房.(原著: 1970)

- 服部幸雄・富田鉄之助・広末保 編 (2000).『【新版】歌舞伎事典』. 平凡社.
- Ito, T., Ono, J. & Ogata, T. (2018). Using Motifs of Folktales for Narrative Generation. in Proc. of the 59th Special Interest Group on Language Sense Processing Engineering, pp. 8-11. (SMC2018 Workshop on Informational and Cultural Narratology and Cognitive Content Generation.)
- 蜻蛉日記 (1989).『新日本古典文学大系 24』(pp. 35-249). 岩波書店.
- 歌論集 (1975). 橋本不美男・有吉保・藤平春男 校注.『日本古典文学全集 50』. 小学館.
- 源氏物語 (1993, 1994, 1995, 1996, 1997).『新日本古典文学大系』, 19, 20, 21, 22, 23. 岩波書店.
- 松崎仁 (2000). 役者評判記.『【新版】歌舞伎事典』. 平凡社, 404-405.
- 三木竹二 著, 渡辺保 編 (2004).『観劇遇評』. 岩波書店.
- 三浦広子 (2000). 緋い交ぜ.『【新版】歌舞伎事典』. 平凡社, 310.
- 中野三敏 (1985).『江戸名物評判記案内』. 岩波書店.
- 守随憲治・大久保忠國 校注 (1959). 附載 近松の言説(「難波みやげ」發端抄).『近松浄瑠璃集 下(日本古典文学大系 50)』. 355-359. (原著:穂積以貫 (元文3 (1738)).『難波土産(浄瑠璃評注)』.
- 夏目漱石 (2007).『文学論 上下』. 岩波書店.(原著:1907)
- 小方孝 (2007). プロップから物語内容の修辞学へー解体と再構成の修辞を中心として一.『認知科学』, 14 (4), 532-558.
- 小方孝 (2018a). 歌舞伎に向けて (2)一多重物語構造の諸相一. In 小方孝・川村洋次・金井明人,『情報物語論: 人工知能・認知・社会過程と物語生成』. (pp. 209-244). 東京: 白桃書房.
- 小方孝 (2018b). 統合物語生成システムーメカニズムからコンテンツへー. 小方孝・川村洋次・金井明人.『情報物語論ー人工知能・認知・社会過程と物語生成一』. (pp. 247-288). 白桃書房.
- Ogata, T. (2018). A Method of *Naimaze* of Narratives Based on *Kabuki* Analyses and Propp's Move Techniques for an Automated Narrative Generation System. *The proceedings of The 2018 International Conference on Artificial Life and Robotics*. 668-674.
- Ogata, T. (2019). *Kabuki* as multiple narrative structures and narrative generation. In T. Ogata & T. Akimoto (Eds.), *Post-narratology through computational and cognitive approaches*. (pp.192-275). Hershey, PA, USA: IGI Global.
- 小方孝・金井明人 (2010).『物語論の情報学序説ー物語生成の思想と技術を巡って一』. 学文社.
- 小方孝・川村洋次・金井明人 (2018).『情報物語論ー人工知能・認知・社会過程と物語生成一』. 白桃書房.
- 小野淳平・伊藤拓哉・小方孝 (2019). 昔話のモチーフのプログラム化とモチーフ構造の比較.『人工知能学会第2種研究会ことば工学会資料』, 61, 51-62.
- 小野淳平・小方孝・伊藤拓哉 (2019). 昔話のモチーフを物語生成へ利用するための基礎研究.『2019年度人工知能学会全国大会(第33回)論文集』, 1F2-NFC-1-05.
- 大浦康介 編著 (2017).『日本の文学理論ーアンソロジー』. 水声社.
- ウラジーミル・プロップ, 北岡誠司・福田美智代 訳 (1987).『昔話の形態学』. 白馬書房.(Propp, V. (Пропп, В. Я.) (1969). *Морфология сказки*, *Изд.2e*. Москва:Наука.) (原著:1928)
- 作者式法戯財録 (1972). 郡司正勝校注.『日本思想大系 61 近世芸道論』, 493-532. 東京: 岩波書店
- 世界綱目 (1916).『珍書刊行会叢書 第9冊 世界綱目・芝居年中行事・劇界珍話』, 6-46. 東京: 珍書刊行会.
- 関敬吾 (1978a).『日本昔話大成 第2巻 本格昔話一』. 角川書店.
- 関敬吾 (1978b).『日本昔話大成 第3巻 本格昔話二』. 角川書店.
- 関敬吾 (1978c).『日本昔話大成 第4巻 本格昔話三』. 角川書店.
- 関敬吾 (1978d).『日本昔話大成 第5巻 本格昔話四』. 角川書店.
- 関敬吾 (1978e).『日本昔話大成 第6巻 本格昔話五』. 角川書店.
- 関敬吾 (1979a).『日本昔話大成 第1巻 動物物語』. 角川書店.
- 関敬吾 (1979b).『日本昔話大成 第7巻 本格昔話六』. 角川書店.
- 関敬吾 (1979c).『日本昔話大成 第8巻 笑話一』. 角川書店.
- 関敬吾 (1979d).『日本昔話大成 第9巻 笑話二』. 角川書店.
- 関敬吾・野村純一・大島広志. (1979e).『日本昔話大成 第12巻 研究篇』. 角川書店.
- 関敬吾 (1980a).『日本昔話大成 第10巻 笑話三』. 角川書店.
- 関敬吾・野村純一・大島広志. (1980b).『日本昔話大成 第11巻 資料篇』. 角川書店.
- 志野葉太郎 (1991).『歌舞伎 型の伝承』. 演劇出版社.
- Steele Jr., G. L. (1990). *Common Lisp: The language, second edition*. MA, USA: Digital Equipment.
- 田口章子 (2003).『歌舞伎と人形浄瑠璃』. 吉川弘文館.
- 富澤慶秀・藤田洋 編 (2012).『最新歌舞伎大事典』. 柏書房.
- 吉本隆明 (1965).『言語にとって美とはなにか I, II』. 勁草書房.
- 吉本隆明 (1968).『共同幻想論』. 河出書房新社.
- 渡辺直己 (2012).『日本小説技術史』. 新潮社.
- 渡部直己 (2017).『日本批評大全』. 河出書房新社.
- 渡辺保 (1989).『歌舞伎一過剰なる記号の森一』. 新曜社.
- 渡辺保 (2000). 芸と型と役者と.『劇評家の椅子ー歌舞伎を見る一』. 朝日新聞社, 291-307.
- 渡辺保 (2004).『歌舞伎一型の魅力一』. 角川書店.
- 渡辺保 (2013).『歌舞伎一型の神髄一』. 角川学芸出版.
- 世阿弥芸術論集, 田中裕 校注 (1976).『新潮日本古典集成』. 新潮社.